

土手なり。長さ百間許。

糧穀倉跡 八王子権現社の後山すべての山際に米麦などの焼けて炭になりたる粗いまに出る。

前田利家并に上杉景勝は笛吹峠を越えて、松枝の城主大道寺駿河守政繁を攻めて降参させ、渠を案内者として武州へ攻め入り、鉢形の城主北条安房守氏邦を降し、その近辺の小城数ヶ所を攻め、松山城を開城させ、川越は政繁が持城なれば自落し、松山城の降士を嚮導として大道寺に添えて先隊とし、兩家軍勢凡そ一万余を後陣に押し、六月十五日八王子の城に向わせ、城の庄えとして城の近辺を囲ませける。兩将は小田原へ赴きて、豊臣殿下に謁し、これまでの軍功を述べんとす。殿下その軍功を聞かせ給いて格別の褒美なかりければ、兩将案に相違し退出して、殿下附近の人を以てその意を問ひ奉らせけるに、殿下宣うには、兩家の軍功その賞なきに非ずといえども、数ヶ城に向つて和融させ、或はまた人質をとつて開城させ、兩家の大軍戦功を顕わしたることなし。数ヶ城の内、一ヶ城なりとも壘壁を踏み潰し、敵軍を塵にし、武威を関東に振いなば、その功は技群ならんと宣う由。兩将伝え聞きて、殊に奮激する

こと甚しく、それより八王子を攻めんと披露して、即日小田原を打ち立ちて、兩将十九日八王子城に到着す。

去る十八日前田、上杉の兩将、小田原より八王子城へ来たる時、秀吉公は木村常陸介を呼びて宣うは、彼等憤りに堪えずして我攻めに攻むれば、士卒を損すべし。汝赴きて、能々これを論し、軍士を損せざるようになすべしと命ぜらる。常陸介即日打ち立ちて、八王子へ来たりて、軍監をなす。

「古戦記云」六月廿三日武州八王子慈根寺の城主北条陸奥守氏照は小田原へ籠城し、その麾下并に家臣勇銳の士多く留守たり。先達前田利家、上杉景勝の旨に依つて北条安房守氏邦より城中へ使を申し入れるは、小田原既に陥り関八州一統に豊臣殿下に雌伏す。早く城をあけて主君氏照と存亡を共にすべき旨を説かしむ。城将中山、狩野、近藤等肯んぜずして曰く、氏照既に降らば、墨附をおくり壘をあけて退くべき旨の下知あるものか、然らざる間に降参せば、武名の瑕瑾後世遁るべからず、氏邦并に大道寺が如き臆病者がいふところ一円承引なりがたし。おのおのが如き弱兵は当城中に一人もなき旨を返答せしかば、利家、景勝も感激浅からざれども、攻めずしては叶わざることなれば、兩

大將は上州、武州の降人を先鋒として一万五千余の軍兵を亥の刻より段々に進め近寄らせて、丑の刻に横山に至り、黎明に八王子町構えの城戸を破るといへども、城までは遙かに遠きゆえ是を知らず。守兵少くして、恣に是を破り入りて城際に押し詰める。当城の本丸には氏照の長臣横地監物楯籠り、中の丸には中山勘解由楯籠る。一庵郭には狩野一庵籠り、金子郭には金子三郎右衛門、山下郭には近藤出羽介なり。廿三日卯の刻に利家が先鋒、岩槻の降人横地左近は大手口に至る。矢合わせあり。搦手口へは上杉家の先鋒として大道寺駿河守政繁押し向いけるが、景勝が魁首長藤田能登守信吉が手に平井無辺という八王子素生の者あり。藤田は渠を嚮導として東の方、溪間の水の手の道をつたいて三の丸、一庵郭に押し登り、逆茂木を取り除き、平井即ち一番功名を逐げる。搦手をは景勝が先鋒安田上総介順易競い攻める。大手の利家が攻め口へは城中より横地監物二百騎ばかり突いて出て追いくずす。城兵山本太郎左衛門壹番鎗并に壹番功名を逐ぐる。此人後に上杉家に仕う。この砌、狩野一庵が持口破れて、一庵は屋敷へ引き入り暫く防戦の間に、藤田が二の手甘糟備前守清長は屋敷の後へ廻り

て家に火をかけ攻め入りしかば、一庵并に近藤出羽介助実金子三郎右衛門家重は義を鉄石に比し粉骨を碎き相戦つて終に生害す。安田上総介も表口より乗り入れしかば、横地監物は火の手あがるを見て死物狂いになって戦うゆえ、寄手討たるもの若干にて敗績す。ここに利家が一族中川武蔵守光重、既橋の城を敵より請け取りて守りけるが、微兵を率して当陣に來たり、戦の躰を見て味方のくずるる左より城兵をきそい討つ。そのとき前田慶次利太乱軍を纏めて再び中の丸へ攻めかかる処に、中山勘解由家範は武備場数の驍士、殊に八条修理亮満朝の馬術を伝えて八州無双の達者なれば、大敵に屈せず、城辺まで敵を引き付け矢炮を發して寄手数百人を討ち殺す。時に利家が息男利長の小姓大音藤藏は先登して一番首を得たり。雨森彦太郎という者も首を得て馳せ帰り利長が前に赴きて、一番首は大音なり、臣は二番首の由を帳に載せる。利長大いにその義あることを感ず。この砌、大音は利長の勘気を蒙りしかば、数度姓名をよばわりて、諸人悉く一番乗りとすることを知れり。中山勘解由は勇兵二百ばかりにて数回突いて出て猛勇を振いけれども、その勢次第に討ち死し、いまはわずかに十六